



# オンジャと私

石川県津幡町在住 飯田 勢津子

私の家にオンジャが来る。これは私の秘かな自慢でした。その頃、オンジャが来る家などそう珍しくはなかったのですが、小学生だった私が何故あんなにもオンジャを待っていたのか、今思うとおかしな程オンジャをまっていたのです。私は友達と遊んでいてもオンジャの事を考え、オンジャの姿をいち早く見つけると、用事を思い出したように遊びをやめ家にとんで帰ったものでした。「オッカア、十銭けれえ」「オンジャかア、オンジャ、十銭けるから唄うたえ」私の家は駅から一番近い旅館で、祖父母が経営していました。その頃にしては珍しい洋館風の建物でその名も「昭和館」といいました。オンジャが来ると、きまって顔を出すのは女中さんのユキちゃんでした。親戚の娘さんで、きさくな面倒見のいい人です。



た。オンジャはユキちゃんの声の聞こえ、いつも安心したように唄いました。玄関の片隅に立ち、正面の大きな柱時計を見上げながら腹から唄うのです。掃除を終えてお客さんを迎える準備が整った、旅館のホッとしたひと時でした。大きな柱時計の長い振り子がゆったりと、オンジャの唄に合わせて揺れていました。私はというと、帳場の窓の下に隠れるようにしゃがみ込んで、息を殺していたのです。あんなに待っていたのに、どうしてもオンジャの前に出ることでできなくて、そのくせ、戸の透き間からオンジャの一部始終を観察していたのですから、どうも私は、素直な女の子ではなかったようでした。オンジャの唄は旨いとは思えませんでした。ユキちゃんはいつも十銭玉を渡しながら、「オンジャの声はいい声だ。節まわしがいい」と云って誉めました。オンジャは何やらブツブツ云いながら、首に掛けた袋を懐の奥深く

から出して、押し頂くようにしてお金を入れるのです。袋には身の丈程もある長い紐がついていました。わずかなお金が入っているようで、オンジャは大事そうに袋に紐を巻きつけます。「オンジャ、あっちこっちで銭コ貰って、銭コいっぱい溜ったんだべさ」ユキちゃんがそう云ってからかうと、オンジャはあわてて袋を懐にしまい込み、「ごっつおさん」と云って帰っていくのです。オンジャが帰ると「あの唄は、海の唄か船乗りの唄だ」ユキちゃんは確信したように云うのですが、私にはわかりませんでした。オンジャはハッキリ話すことができませんでした。歌詞が聞き出せなかったのです。オンジャはいつも、背中に石を担いでいました。魚網で作った袋に入れて担いでいるのですが、石はボロ布に包まれていて、それが本当に石だったのか、何故そんなにも大事そうに重い石を担いでいなければならないのか、私にはとても不思議でなりません。「オンジャが何で石、担いでいるかってねエ、オンジャのオッカアの名前が、イシっていう名前だったんだと、大したベッピンさんだったっていう話だけだね。オンジャが長いこと船に乗って帰って来ない間に、オッカアがよその男と逃げちまったんだってサ。オッカアに逃げられてから気が狂ってね。オッカアと同じ名前の石、担いで歩くようになったんだと」ある時ユキちゃんがこんな話をしてくれました。私が疑問に思っていたことが分りました。奥さんのイシを思うあまり、来る日も来る日も石を担いで歩くなんて、何と悲しいことだろうと、子ども心にオンジャが哀れでなりません。

オンジャはとても頭のいい人だったということです。船長さんをしていたという人や、ただの船乗りだったという人がいましたが、私はオンジャは船長さんだったに違いないと、船長さん説を信じていました。何故なら、オンジャは、軍人さんがかぶるような立派な帽子をかぶっていて、立派な髭を生やしていたからです。オンジャは背中の石の他に、腰にもいろいろ物をぶら下げていました。食事用のお碗や手拭い、青く透き通った小さなガラス玉の浮きや石はまるで宝物かお守りのように腰の回りで揺れていて、羨ましくさえ思われました。時々オンジャは食べ物を貰いに来ます。「オッカア、ままけれえ」

「オンジャ、ままけるから唄うたえ」何故か私の家ではオンジャに唄を要求したのです。ユキちゃんは顔を出し声をかけると、イソイソと台所から残りご飯やおかずを持ってきて、オンジャのお碗にいれてやりました。オンジャは玄関の上り口に腰を掛け、チャッチャッと舌鼓を打ちながら、さも美味しそうにご飯を食べて行ききました。自慢の髭はご飯粒だらけ、私は、やはり帳場の窓からこっそり視き見、本当にイヤな女の子でした。「オンジャ、お湯呑みな」オンジャに話かけながらユキちゃんは、ご飯を食べるのを待ってお湯を入れてやるのです。オンジャは、入れて貰ったお湯でお椀や箸をきれいに洗うと、そのお湯を呑みました。片付けを終えると帰りぎわに必ず、「ごっつおさん」と云って行くオンジャに、ユキちゃんはいつも感心していました。話しかけられても、まともな返事も出来ず、無表情で相手の顔を見ることさえ避けていたオンジャでしたが、お礼を云うことだけは忘れませんでした。私の家には他にも何人かの女中さんがいましたが、オンジャが来ても、皆嫌がって出ようとはしませんでした。そのたびにユキちゃんは、「オンジャだって人間だべさ。何も悪いことしないし、石っこしょって歩いて十銭貰って唄っこ唄って、メンコイベサ」と云ってオンジャをかばいました。オンジャは時々、新聞紙に包んだ駄菓子やパンを持って来るがありました。は他の家から貰って来たものようでしたが、くしゃくしゃになった包みを大事そうに抱えて来て、タカちゃんに差し出すのです。当時三歳か四歳だったタカちゃんは、オンジャが来ると、チョコチョコ出て来て愛嬌を振りまくものですから、オンジャもタカちゃんが可愛いくてならなかったのでしょう。「いいいよいよ、折角貰って来たんだし自分で食べな」ユキちゃんがあわててそう云っても、オンジャは差し出した手を引っ込めようとせず、なおも受け取るよう促すのでした。タカちゃんが嬉しそうに手を出すと、オンジャは顔をほころばせて頷き、タカちゃんの頭を撫でて満足そうに帰って行くことがたびたびあったのです。「オンジャやったらねえ、汚い手して、爪切るハサミも無かったんだべさ。長い爪でね、あの手から貰うのは勇気いるけどね、それでもあんだ達喜んで食べてたんだよ」私達は大人になってからもよくからかわれましたが、戦後の食べ物のない時代だったので。もしかして私がオンジャを心待ちにしていたのは、このためだったかも。雪解けの季節が近づいて来ると、留萌の空は低くなりドンヨリとした灰色に変わりました。鯨ぐもりと云って鯨がよく捕れるとか。夜になると遠く日本海の沖合いから、ソーラン節の唄が風によって聞こえて来ます。大漁を知らせるその唄に、人々は心を踊らせて外に出て聞き入ったものでした。春休みになると私は友達とよく岸壁へ行きました。岸壁の朝は威勢のいい掛

け声が飛び交い、大漁旗をなびかせて漁船の帰って来るのが見られます。どの船もこぼれ落ちそうな程、鯨がピチピチ跳ねていて銀鱗が朝日に輝いていました。ゴメが鳴きながらその上を飛び交い、時折目にも止まらぬ早業で自分の腹程もある鯨をくわえて行きます。空中でクックとそれを呑み込んでしまう様子は、それは見事なものでした。私達はそれ



を見るたび歓声をあげました。漁師のおじさんは笑いながら生きた鯨をくれました。私は中でも一番元気そうな大きな鯨を指さし、それを貰うのが楽しみでした。オンジャはいつも岸壁にいました。一人離れた所で、じいっと海を見たり漁船を見たりしているのですが、私達が鯨を貰っているのを見ると、自分も船に近づいて来て、黙って立っているのです。

「オンジャにも、けるか。」漁師の人は賑やかに掛け声をかけながら、沢山の鯨を針金に掛けてオンジャに持たせてやりました。すり減った長ぐつに荒縄を巻きつけて、それでも滑りそうになりながら、雪解け道を鯨をぶら下げて行くオンジャの後姿を私達は、あの鯨をどうやって食べるのだろうと、心配しながら見送ったものでした。

「オンジャが逃げた奥さんを探している」こんな噂があがったのは、私がまだ小学校にも上がらない頃でした。戦争が終わらず、駅前では兵隊さんを送り出す光景がよく見られました。白い割烹着姿の女の人が沢山いました。人々は日の丸の小旗を振り軍歌を歌い、張りつめた重苦しい空気が辺りを包んでいました。ある日、オンジャの姿がそこに見えたのです。オンジャは目をギョロギョロさせて奥さんを探しているようでした。手には長い鉄の棒を持ち、まるで仁王様のようなオンジャを、私は恐ろしいと思いながら隠れるように見ていました。兵隊さんを送り、人々が帰ろうとした時でした。突然オンジャが大声でわめき、一人の女の人にむけて鉄の棒を振り上げたのです。血走った目、カッと開いた大きな口。わたしは夢中で家の中に逃げ込むと、帳場の机の下で震えていました。オンジャは間もなく男の人達に捕えられ、女の人も無事だったとか。こんなことがあってから私は、オンジャが恐ろしくて恐ろしくて、オンジャが来るたび家へ逃げ帰って机の下に隠れていました。ところがオンジ



ヤは、まるで人が変わったように大人しくなり、穏かな人になっていたのです。おイシさんのことを諦めたのか、それとも忘れてしまったのか、オンジャの心は知る由もありませんでしたが、背中の上だけは離そうとせず、重い石を担いで留萌の街をひたすら歩きわすかなお金や食べ物を買っていたのです。私が中学生になった年、駅前前の旅館は人手に渡ってしまいました。祖父が他の事業に手を出し、失敗してしまったのです。新しい家はすでに副港の埋め立て地に建てられていました。あの青く澄んだ副港の入り海は跡形もなく埋め立てられ、私の家の他にも家がボツリボツリと建ち始めていました。私の家は結局又旅館となってしまうましたが、ここにはオンジャは来ませんでした。しばらくは女中さんもなく私は家の手伝いをしながら学校へ行っていましたが、そんなある日、意外な所でオンジャに出会ったのです。開運局の横に用水がありました。オンジャは用水の向うで何かを探しているようでした。久し振りに出会った懐かしさと好奇心とで、私は足を止め、見るともなくオンジャの様子を見ていたのです。胸がドキンとなりました。あの背中の石が無いのです。来る日も来る日も大事そうに担いでいた、あの石が無くなっていました。初めて見るオンジャの背中です。石を担いでいないオンジャは他の人のように見えました。確かにオンジャのようでした。立派だった帽子はボロボロになり、すでに無くなっていました。髭もいつのまにか剃り落とし、すっかり薄くなった髪の毛が弱々しく風に吹かれています。背中はその石に押しつぶされたように、痛々しいほど丸くなっているではありませんか。腰に下げた石だけが、オンジャであることを証明していました。オンジャは埋め立て地の生えて間もない草の中から、オオバコの葉を探しているようでした。数枚のオオバコの葉を手にとると、用水の杭の強さを確かめています。しっかりした杭を探し当てると、やわらズボンをおいで杭につかまり、用水を後だにしてぶら下がる恰好になったのです。私はとっさに近くにあった船の陰に隠れました。船底にもたれるようにしゃがみながら、いつか聞いた話を思い出していました。「漁師が船の中で用を足したくなかった時、船べりにつかまって尻を海にむけて用を足す」ということでした。「漁船には便所がないから、ウンコをするのも死にもの狂いだ」と、その人は大きな声で笑いながら話してくれたのです。オンジャも海の男だったのです。これはきっと、そうかもしれないと思うと、胸の高鳴りをどうすることもできませんでした。かと云って、この場から動く訳にもいきません。こうなるとはオンジャが用を足し終えるまで待つ他はないのです。私はとても悪いことをしてしまったと思いました。やがてオンジャは杭から上がって来ると、ズボンをはき何ごともなかったように歩



いて行きました。私は船底に身をかがめたままオンジャを見送りました。背中を丸めて歩いて行くオンジャの姿がますます小さく見え、胸をつかれる思いでした。私がオンジャを見た最後の日だったのです。留萌高校には「オンジャ」というあだ名の先生がいました。佐藤先生といって音楽の先生でしたが、あだ名にピッタリの先生でした。高校生になった私は音楽の時間が大好きでした。先生の作曲した歌を体育館や廊下の片隅に何人か寄るとよく歌ったものでした。先生のあだ名は街中の人知っていて、今でも「オンジャ」と云うと、「どっちのオンジャ」と云程佐藤先生のあだ名は有名だったのです。ある時、留萌新聞の片隅に、オンジャの死を知らせる記事が載っていました。旅館の掃除を手伝いに来ていたユキちゃんは、いち早くその記事を見つけ、「やあやあ、オンジャが死んだってさ、オンジャもとうとう成仏したか」と賑やかに言って新聞を見せてくれました。私達はこれも供養になるかと、オンジャの思い出話をしたり、昭和館の思い出話をしたりしていました。ところが翌日の新聞に、「オンジャが生き返った」という記事が出ているではありませんか。これには驚きました。市役所の人がお棺の釘を打とうとした時、お棺の中のオンジャが「ウン」と唸ったというのです。「全くオンジャらしい」ユキちゃんはホッと笑ったように笑いました。その日、行き交う人は挨拶代わりに、「オンジャが生き返ったんだってねえ」と笑いましたが、誰もが喜んでいる様子でした。そんな事があって、しばらくしてからオンジャが本当に亡くなったということを知りましたが、もう新聞には載りませんでした。オンジャはそうとう衰弱していたとか、私は何処で息を引き取ったのかとても気になりました。市役所の人に見取られながら市立病院で息を引き取ったオンジャを想像しようとしていました。もう誰からもオンジャの噂は聞かれなくなり、わたしのオンジャの思い出はここで止ってしまったのです。私は保母となり、結婚して石川県民となりました。留萌を離れて三十年余り過ぎた今、ふとしたきっかけがオンジャを思い出させてくれたのです。私はあれこれとオンジャの思い出を懐かしく

思い出していましたが(そう言えば、オンジャの名前は  
何というのだろう。)今迄考えてもみななかったオンジャ  
の名前が気になり出したのです。思いきって留萌市役所  
に電話してみました。「当時は引揚者や、ヤン衆など出稼  
ぎの人が多く、戸籍を揚げないまま亡くなった人もいて  
わからない」という返事がしばらくして返ってきました。  
わからないと云われると知りたいという気持ちがつのり、  
タカちゃんやユキちゃんに電話して、なんとかオンジャ  
の名前を知ろうと思いました。「オンジャか、懐かしいね  
え、石担いで歩いてたねえ、あのね、瀬越の浜にオンジ  
ャの石碑があるんだよ、ただの石だけだよ、ここにオン  
ジャが住んでいたってというような事が書いてあってさ、  
草むらで見逃しそうだけど、確かにあったよ。」タカちゃ  
んの言葉に胸が熱くなりました。なんとかその石を見たい  
と思うと、北海道と石川県との隔たりがはがゆくさえ  
思われました。そんな私の思いが通じてか、その年の夏  
に結婚式で北海道へ行くことができたのです。私はさっ  
そく瀬越の浜へ行きました。潮の匂いがたまらなく懐  
かしく、私は日本海を前にして大きく深呼吸をしました。  
身欠き鯨の匂いが私を心底故郷に呼び戻してくれました。  
私は古い民家を訪ねて歩きました。もっとオンジャのこ  
とを知りたい。なんとかオンジャの名前を知りたい。そ  
んな思いでいっぱいでした。すれ違う人や働いてる人、  
もう誰彼となくオンジャのことを聞いて歩きました。市  
役所や海のふるさと館などにも行きました。まるで、一  
端の記者にでもなった気持でした。どの人もはじめは戸  
惑っていましたが、懐かしそうに、知っている限りのオ  
ンジャについて話してくれたのです。「十銭けれえ」と云  
っていたのが、「十円けれえ」になっていたことを知って、  
嬉しくさえ思いました。でも、聞いて歩くうちに、意外  
な事実を知らされたのです。聞いて歩かなければ良かつ  
たと思いました。一人の人間の過去を、私は知らず知ら  
ずのうちにほじくり出していたにすぎないのではと思う  
と、気持が暗く重くなってしまうのを、どうすることも  
できませんでした。こんなこと、書こうかどうしょうか  
迷いましたが(オンジャ、ごめんね。)オンジャは富山  
県魚津のひとでした。ヤン衆として留萌に渡り、鯨漁の  
他にナマコ漁を主にしていたということでした。小柄な  
人でしたが、真面目で働き者だった彼は周囲の人に祝福  
されて、飯炊きに来ていたイシと結ばれたのでした。彼  
はこれまでも増して働きました。イシは近くに住むN  
さんの娘さんでしたが、気立てがやさしく器量良しでそ  
れは働き者でした。二人の間には子どもも出来、イシは  
飯炊きを続けながら番屋で幸せに暮らしていました。あ  
る日漁に出た彼は、その日は帰る予定ではなかったの  
ですが、夜中にひょっこり帰って来たのです。虫の知らせ  
だったのでしょか。自分達の部屋には網元と妻のイシ

が.....。彼は自分の目を疑いました。ところが逆  
上したのは網元の方だったのです。予定外に帰って来た  
彼をなじり、傍らにあったスコップのような物で、彼を  
思いきり叩いて叩いて叩きのめしたというのです。それ  
は見るも無残な光景だったと云います。いたたまれな  
くなったイシは、泣き叫ぶ幼い子どもを抱え逃げ出し  
てしまい、行方がわからなくなってしまったのです。血だ  
らけになった彼は命だけは取り留めたものの、気が狂っ  
てしまったのでした。番屋を出た彼はイシの事だけを思い、  
イシに似た石を拾い集めて歩きました。イシの残して行  
ったたった一枚の着物に石を包み、網の袋にそれを入れ  
て担ぎ、来る日も来る日もイシの姿を求めて歩いたので  
す。そんな彼を人々は「オンジャ」とよんだのでしょ  
うか。オンジャは番屋近くの小屋で寝泊りしました。そ  
こはお祭りに使うおみこしなどの道具を入れて置く小屋  
でオンジャはそこを占領してしまったということでした。  
美しい石を見つけると小屋の中に持ち込み、慈しむよう  
に石を磨いているオンジャの姿を見たという人もおりま  
した。私はその小屋があった所を見せて貰いました。オ  
ンジャが亡くなってから建て直されたそうで、今は「瀬  
越会館」として使用しているとのことでした。カギがか  
かっている中までは見せてもらえませんでした。何か  
とても懐かしいものに出合ったような気持でした。オ  
ンジャの晩年は、近所の人何かと面倒を見ていたそう  
ですが、ある時、しばらくオンジャの姿を見かけていな  
いことに気付いた近くの人が見に行った時には、すでに冷  
たくなっていたのです。死後何日か経っていて、せんべ  
い布団の中で寝たまま息を引き取ったということだけが、  
せめてもの救いでした。布団の下には千七百余りの小銭  
が袋に入って置かれてあったとか。享年四十七歳とい  
う若さでしたが、その顔も体も二十歳以上も年老いて見  
えたということでした。栄養失調ですっかり痩せこけて  
いたのです。市役所の人のお世話で近所の人がお葬式を  
出されたそうですが、遺骨は娘さんが引き取って行かれた  
ということでした。娘さんがどんな思いで父親を見、遺  
骨を抱いて行ったかと思うと涙が止りませんでした。人  
が信じられず、人に心を許すことのなかった彼の半生だ  
ったのでは、そんな思いがフツと頭をよぎりました。た  
だ黙って生きて来た彼の荒んだ心の中で、我が子にも似  
た幼い子どもを見る時だけが、心安らぐひとときだった  
のかもしれない。新聞紙に包んだパンや駄菓子やタカ  
ちゃんに渡し、タカちゃんの頭を撫でて行ったあの安堵  
にも似た表情は、紛れもない父親の顔だったのです。私  
はふと思い立って瀬越会館の前の草むらを探しました。  
タカちゃんが云っていたオンジャの石碑なるものを思い  
出したのです。でもそれらしい物は見つかりませんで  
した。私は帰りの道を複雑

な気持で歩いていました。闇雲に聞いて歩いたことを半ば後悔していました。それにしても、誰一人としてオンジャの名前を知っている人はいませんでした。もしかして、「オンジャ」というのが本名だったのでしょうか。私はオンジャに当てはまる字を探しましたが、適当な字は見つからず、(オンジャはオンジャでいいのかもしれない)と思うようになりました。この日、オンジャの話を聞く中で、ひょんなことから小学校時代の友達と連絡がとれて、夜タカチャンの居酒屋へ集って何十年振りかの再会を喜び合いました。これもオンジャが引き合わせてくれたのかもしれないと思うと感激もひとしおでした。翌日結婚式で札幌へ向う車中で、私はオンジャのことはかり考えていました。そして、留萌の歴史のどこにもオンジャのことが載っていなかったことを思い出して、寂しくさえ思いました。留萌を語る時、歴史の片隅にチョッピリでもオンジャのことを入れてもらうことは、本当におかしな話なののでしょうか。オンジャの存在はあの活気あふれた鯉漁とともに、いつ迄も私達の古里の温もりとなって、留萌に根付いているように思われるのですが。

#### 【追記】

実はこの文章は、留萌市民文化誌「波灯」10号に掲載されていたものであります。筆者と同じ時代を過した私にとっても、オンジャのことは忘れられない思い出として心の片隅に残っていました。遊びにも生活にも、春はニシンを中心に動いていた少年時代。私の家のすぐそばにオンジャが住んでいたのも、特異な存在だったけれど、何時もすれ違っている内、子供時代の見慣れた風景のようになって、記憶の中に閉じ込められていたのだと思います平成13年10月13日に、私共の母校である留萌高校OB会の萌陵会が留萌市で開催されました。丁度、私達の学年が当番幹事となりましたので、ついでに、私達昭和34年卒の同窓会も開催することになりました。遠い所、石川県より、筆者も駆けつけてくれました。42年ぶりの再会に、百名もの仲間は、お互いの話しに昔を思い出し、時間の経つのも忘れて三々五々、街へ繰り出して行きました。この時、筆者にお願いして、この文章をホームページに載せることを承諾頂きました。イラストについては、やはり同じ時代に、オンジャを見て育った、当社の飛渡さんに書いてもらいました。顔のイメージが浮かばず困っていましたが、鉛筆画の、アンティークな時代を思い起こさせる、懐かしい絵ができましたこと心より感謝いたします。

小 杉 忠 利